岡山の博物館

岡山県博物館協議会会報 No.51 平成29年3月

CONTENTS

P1 …… わが館のイチ押し　鏡野郷土博物館
P2 …… 館長随想「一般財団法人 河田病院 狸庵文庫美術館」
（理事長兼館長　河田　隆介）
P3～P5 … 加盟館からの便り
（津山洋学資料館　－新館7年、そこから先へ－）
（大原美術館　せぴろまの夢）
P6～P7 … ちいさな展示がつながれば
「ひろがる酒の輪　－13機関の連携展示－」
P8 …… 気になる情報コーナー
（岡山芸術交流2016）

わが館のイチ押し　鏡野郷土博物館「美作地域の民権運動の主導者・中島衛」

鏡野郷土博物館は、図書館・ホール・会議室等が備えられた鏡野町総合文化施設「ペスタロッチ館」2階にあります。平成15年に開館し、旧鏡野町に関する資料を中心に展示していましたが、平成25年度に企画展示スペースを整備し、合併後の鏡野町に関する資料の展示をはじめ、企画展も実施しています。

中島衛

常設展示室は、埋蔵文化財資料、民俗資料、民俗芸能（人形芝居）資料、そして中島衛に関する資料のコーナーに大別できます。

中島衛とは、明治前期の美作地域において活発化した民権運動を主導した人物の一人で、天保14年（1843）に当時の西北條郡香々美村（現在の鏡野町香々美）に生まれました。中島家は代々大庄屋を勤める家柄で、衛も若年から大庄屋手伝として父の補佐をしていたことが史料に残されています。

明治維新後は、北条県の戸長、郡書記などの要職を務めつつ、立石岐や井出毛三、安黒基ら地域の豪農層らと共に民権運動の中心メンバーとして活躍しました。明治11年（1878）には共之社を設立し、地域の産業・教育の振興に尽力します。そして県内で国会開設運動が盛んになり始めると、明治13年（1880）1月郷党親睦会を結成、200名以上が加盟し自らが会長に就任しました。その後郡書記を辞任し、4月に岡山県会議員に選出されると、美作同盟会や美作自由党などの結成、機関誌『美作雑誌』の発行に私財を投じて主催・運営に尽力しますが、念願の国会開設を5年後に控えた明治18年（1885）7月、病のため42歳の若さでその生涯を閉じました。

鏡野郷土博物館には、中島家のご子孫から寄贈された大庄屋文書や、中島衛の民権運動をはじめとした活動・交友を示す史料を所蔵しており、その一部を公開しています。

郷党親睦会会員証

美作同盟会名簿

中島衛関連資料コーナー

気になる情報コーナー

岡山芸術交流2016

岡山芸術交流2016は、世界第一線で活躍する、16カ国31組の現代アーティストの全51作品を紹介した、現代アートの祭典でした。2016年10月9日（日）～11月27日（日）まで44日間、旧後楽館天神校舎跡地をメイン会場とする岡山市内中心部8会場で開催されました。城下エリアでは「城地下シンボルタワー」や「ホテルエクセル岡山」の壁面などが野外アートの一つとなり、見慣れた日常の景色に、新たな「気づき」を提供してくれました。

会場の一つとなったオリエント美術館では、7作家12作品を紹介しました。事前視察に訪れたアーティスティック・ディレクター、リアム・ギリック氏の「美術館の雰囲気を大切にしたい」という要望を受け、館蔵品と現代アート作品を併置した展示空間を追求しました。

すでに何度も訪れている来館者には、展示室中央ホールに設置された金属製リング作品「Wire sculpture with ring」（ロバート・バリー）、展示室2階光庭上部に吊り下げられたクマとネズミのぬいぐるみの「Untitled（Mobile）」（ペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイス）といった、コンテンポラリーアートの巨匠作品とオリエント美術工芸品という、新旧のアートが混在する新しい体験が大変好評でした。一方、現代アートの祭典らしく、全国各地からやってきた若い人たちや外国からの来館者には、オリエント美術工芸品が新鮮に写ったようで、ツイッターやフェイスブックといったSNS上には、館蔵品に対する感想も目立ちました。

会期中は好天に恵まれ、秋の岡山市街地を満喫する散歩がてら、8会場を廻られた来場者には、アートと自然を体感する心の散歩ともなったのではないでしょうか。

（岡山市立オリエント美術館　副主査学芸員　四角隆二）

編集後記

2016年度は岡博協創立25周年記念として、1年間にわたり加盟館紹介パネル展示、スタンプラリー、ワークショップや講演会などの交流事業を行いました。開催館、講師の皆様方にはご協力ありがとうございました。スタンプラリーのWプレゼントの応募者数は1436名。「初めてきました」「楽しかった」「またしてほしい」と好評でした。交流事業は私たち自身も加盟館各館の魅力や豊かな人材を再認識する機会になったのではないでしょうか？　何らかのかたちで継続していけたらよいなと思っています。

（事務局）　岡山県立美術館　福冨　幸

岡山県博物館協議会会報
岡山の博物館
No.51　平成29年3月発行
編集・発行　岡山県博物館協議会
会　長　守安　收
事務局
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
岡山県立美術館内
TEL 086-225-4800　FAX 086-224-0648

館長随想

一般財団法人 河田病院 狸庵文庫美術館

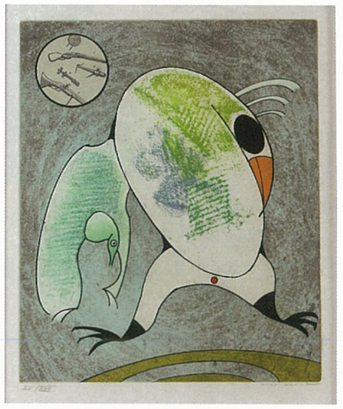
理事長兼館長
河田　隆介

狸庵文庫美術館は開館して、五年目に入りました。この美術館は小泉元首相による公益法人改革にともない、看護学校を閉校したあとに作られたものであります。

館蔵品は茶道具、特にさび道具を中心に収蔵しております。また美術館の主体が精神科病院であることなどから洋画作品として超現実派（シュールレアリスム）系の作品や象徴主義系の作品など無意識世界を表現する様な作品を収蔵しています。また茶道具の展示は、茶事、茶会の後の道具組のまま展示している所が特長であります。

展示室は三ヶ所あってそれぞれ三ヶ月間隔で企画展を行っています。またそのほか、美術館活動として、茶道教室、香道教室、絵画教室など行っています。色々な活動をやっておりますので、どうぞ皆様ご来館いただきますようにお願い申し上げます。

外　観


マックスエルンスト「危機に瀕したとり」

展示室

織田丸壷茶入と花鳥盆

加盟館からの便り

津山洋学資料館
－新館7年、そこから先へ－

学芸員　田中 美穂

津山市を中心とする美作地域は、江戸時代後期から明治時代の初めにかけて、西洋の学問を学び、日本の近代化に貢献した優れた洋学者を輩出したことで知られています。当館は、津山藩医の箕作阮甫旧宅が国の史跡に指定されたことを契機に、郷土ゆかりの洋学者を顕彰しようという機運が高まって、昭和53年3月19日に開館しました。

以来30年余り、大正時代に建てられた旧妹尾銀行林田支店の建物を後利用し、活動してきましたが、施設の老朽化や増加した資料の収蔵場所不足などが長年の懸案となり、新館を建築して移転、開館したのが、平成22年3月19日のことでした。

新館の展示会議では、資料館の職員と研究者や建築家の先生方、展示施工業者の方々が意見を出し合い、白熱した議論を繰り返しました。筆者は当時採用1年目で、右も左も分からないような状態でしたが、「より良い館をつくりたい」という、皆の思いは一つでした。

そうした思いを詰め込んでできあがった常設展示は、プロローグに長崎出島を配し、津山を代表する洋学者の宇田川家、箕作家を中心に、江戸での蘭学の興隆から近代にいたるまでの洋学の歴史をたどる構成となっています。企画展示室では、現在年4回企画展を行っており、常設・企画をあわせると、展示スペースは旧館の約3倍となりました。幸い、観覧された方々からは概ねご好評をいただくことができています。

新館移転後、特に力を入れたことの一つが教育機関との連携です。現在、津山市内の小学校27校の6年生は全員、当館を見学しています。また、毎年夏には津山高校、津山高専の先生、生徒を講師にお迎えし、小学生を対象とした「江戸時代の化学書からの再現実験教室」を開催。就実大学薬学部の先生方にご協力をいただいて行っていた、在村医の家伝薬の分析は、6年かけて結実し、昨年12月に講座を実施しました。

一方、旧館時代から変わらず続けていることは、職員による展示の解説です。団体、個人を問わず、ご要望があった時や、なくても熱心に見学されている方には、こちらからお話をしに行っています。

つい先日、うれしい出来事がありました。来館した高校生たちが、小学校6年生の頃に見学したことや、印象に残っている展示について、話してくれたのです。毎年多くの小学生が来館しますが、一人ひとりの心に、このようにして思い出が残るのだなぁと実感できた瞬間でした。

早いもので、移転から7年がたち、新館という「目新しさ」が薄れ、また次の段階へと進んでいく過程にあります。「もっとPRしなきゃ！」というご意見も、よく頂戴します。様々な課題があります。

洋学という、時代も分野も限定した資料館ではありますが、その特殊性を活かし、津山を代表する歴史の一つとして、より多くの人の心に残る展示ができるよう、職員一同活動を続けていきたいと思っています。

加盟館からの便り

せぴろまの夢

公益財団法人　大原美術館　学芸課長　**柳沢 秀行**

大原美術館は、2013年からの4年間、福島県喜多方市で開催された「喜多方・夢・アートプロジェクト」の中核事業である「せぴろまの夢」展に協力した。

福島県は、太平洋岸の浜通り、東北新幹線が通る中通り、そして会津の3地域に分かれている。そのうちの会津の中核をなすのが鶴ヶ城で名高い会津若松市。その「きたかた」にあるのが喜多方。蔵とラーメンでご存知の方も多いだろうが、武家の町である若松に対して、この喜多方は阿賀川の水運で新潟に結びついた商人の町である。

大正期この街の旦那たちが「喜多方美術倶楽部」を結成し、画家を逗留させては画会を催し完成した絵を買い上げた。小川芋銭、石井柏亭など喜多方を訪れた画家の数は多く、その結果として今でも多くの作品が残されている。さらに、時代が下り終戦直後1946年にこの町で産声をあげたのが「せぴろま会」である。地元の名士大和川酒造の家に生まれた佐藤恒三は東京美術学校彫刻科に学ぶが、折からの戦争で存分な制作も、そして洋行の夢をかなえることなく終戦を迎える。その恒三が喜多方で文化運動を盛り上げるべく結成したのが、セザンヌ、ピカソ、ロダン、マティスの頭文字を繋いだせぴろま会である。

この喜多方と大原美術館を結ぶ縁を作ったのが、会津若松にある福島県立博物館館長で民俗学者そして美術にも造詣が深い赤坂憲雄さんだ。2011年夏に大原美術館が開催する美術講座の講師としてお招きした際、風評被害により農業と観光で大きな打撃を受けた喜多方への支援を乞われた。大原美術館としても高階秀爾館長、大原謙一郎理事長（現名誉理事長）とも異存はない。そしてまずは私が会津を訪ねたが、そのアテンドは岡山県立美術館から福島県立博物館へ転じた川延安直さん。そして川延さんからまず引き合わされたのが、佐藤恒三の甥にあたり、現在の大和川酒造のトップである佐藤弥右衛門さん。さらに弥右衛門さんからは、実に個性的な現在の旦那衆達に引き合わされた。雪に包まれた酒蔵で語り合ったその夜、喜多方の民度の高さを痛感した。

こうしたやり取りを経て当方から提案したのが、大原美術館所蔵のせぴろま4作家の作品を4年間に分けて公開しつつ、同時に、大原美術館のアーティストインレジデンス事業（ARKO）に参加した作家が喜多方でも滞在制作を行い、その作品も合わせてお披露目するものであった。これなら喜多方美術倶楽部やせぴろま会という歴史的事実を呼び起こしつつ、今でも受け継がれる高い民間の活力を顕在化できると考えたのだ。

とは言え、セザンヌやピカソの公開はどこででもできるわけではない。当然のように会場は喜多方市美術館となり、また事業の主催は喜多方市が中心となる。正直、民間のレベルに比して、喜多方市およびその下部組織たる美術館の業務遂行能力には不安なこともあった。しかしながら、少しずつながら喜多方市美術館の施設や運営についての改善も進み、また教育委員会の尽力で、4回の会期中、ほぼすべての平日には小中学校団体の見学が入るなどの熱意も感じられた。

こうして、セザンヌ《風景》、ピカソ《鳥籠》、マティス《マティス嬢の肖像》など当館にとっても主要作が喜多方へと出向いた。そして、それ以上に素晴らしい成果が、花澤武夫、北城貴子、上田暁子、津上みゆきのARKO経験者たちの作品と喜多方の皆さんとの深い交友である。「もしかして大原のより良くない!?」と思うほど、各人が倉敷滞在以降の進化を存分に発揮した作品を描き、そしてたくさんの人から愛されて倉敷と喜多方を結ぶより強い絆となってくれた。

当館からも大原謙一郎、あかねの新旧理事長に、高階館長夫妻、そして全ての学芸員が喜多方を訪ね、大いに酒を酌み交わし語り合った。震災復興支援などと大仰なことは言えないが、私たちも喜びを得、またこの事業を通じて生まれた人々の交流はさらに飛び火のように広がり様々な成果に結びついている。

ちいさな展示がつながれば「ひろがる酒の輪 −13機関の連携展示−」

岡山市立中央図書館　飯島　章仁

ひろがる酒の輪

〜酒とその歴史をめぐる13機関の連携展示〜

2016年9月から翌年2月まで、末尾に記した13の資料保存機関が連携して「酒」を共通テーマに展示を行いました。

地域差はあるにせよ、日本の文化は米作をひとつの基調にして発達してきました。酒は日本人の宗教観や生活に深く根ざしており、聖俗のさまざまな儀礼に欠かせず、食糧統制や徴税のため、しばしば時の政府の保護や統制を受けてきました。そして地域の大規模事業者であった酒造家は、経済や金融の動きに大きな影響を及ぼすとともに、しばしば地域社会の維持・発展に尽くし、文化・芸術の振興にも大きな貢献をしてきました。したがって、何らかのかたちで酒に関連のある資料や伝承は、各地に広く豊富に残されています。

この企画に参加した13の機関は、岡山市、赤磐市、瀬戸内市、備前市に立地する図書館、記録資料館、博物館等からなり、設置法令による施設の区別を超えた多様な機関が資料を通して結びつくことができました。これには各機関が酒に関わるいずれかの資料を所蔵していたことが大きいですが、日頃の活動を通して築いてきた地域のさまざまな人との信頼をもとに、地元の酒造会社などからも出品や協力を仰いで、みんなが共通のテーマに沿って広く深く展示を工夫でき、心躍る経験をすることができました。

むろん、このたびの参加機関は博物館であっても小規模なところが多いし、まして図書館や記録資料館や埋蔵文化財管理センターは資料を豊富に所蔵していても展示そのものが本務ではないため、展示にあてられるスペースはわずかです。私が勤務する岡山市立中央図書館には幅4mの壁面展示ケースが3つありますが、他の機関も同じくらいだったと思います。しかし、それぞれは小規模な展示でも共通のテーマを掲げて連携すれば、もっと大きな何かができるのではないかという期待はありました。

展示は、冒頭に記した期間にわたり、各機関が1か月〜2か月程度の会期で五月雨式に開催しました。そもそも前年度の冬に急に思いついたアイデアでしたので、私が偶々出会った担当者へ企画を説明し、参加を呼び掛けたところ13機関の賛同を得たというものでしたから、あらかじめ用意された予算はなく、おおかた決定済みの年間展示スケジュールへ酒の展示を無理のない範囲で入れていただくのにも苦労があったと思います。しかし、「おもしろいからぜひ可能な範囲でやってみましょう」との言葉をいただいて、なんとか進めることができました。

このほかに行ったのは、各機関の展示情報を集約し、13機関の開催要項と付帯事業を一覧にまとめたA3版1枚(両面)のリーフレットを電子データで作り、それを各機関でプリントして広報や他会場の案内に役立てていただいたことでした。予算がなくてオフセットの印刷物は作れませんでしたので、広報は各機関がそれぞれ行うことに決めましたが、この間に備前市立備前焼ミュージアム学芸員の岡本珠音さんが、酒米の稲穂を巧みに図案化した共通のロゴマーク(冒頭の図版)や、さきほどのリーフレットのデザインを考えて下さいました。

展示が終わって深く感じているのは、共通テーマを掲げて取り組んだことで、各機関の特色がよく滲み出たことです。それぞれ固有の設置目的があり、特徴ある資料を収蔵しており、積み重ねてきた活動の経験があるため、各々の展示内容には彩り豊かな特色があり、個性が際立っていました。そのため、全体では展示の対象となった時期が古墳時代から桃山・江戸時代を経て近代、とりわけ戦時下から現代に及び、展示された資料の分野も埋蔵文化財、古文書、備前焼の作品、民俗資料、文学者との関連性、動画映像、写真、図面、戦時下のくらし等々とさまざまです。岡山県立図書館の展示では、手に取って読むことができる書籍が多数揃えられましたが、それらは借りて帰ることもできるわけです。これほど多様な展示方法を各機関が試みて、酒の歴史・文化と地域との関わりを余すところなく紹介できたのは、連携展示の妙味といってよいことでした。これら13会場の展示をすべて巡り歩いたら、大規模な博物館で開催される特別展にも比肩する豊かな内容を結集できたと思います。

しかし私たちはスタンプラリーの予算もなく、共通リーフレットを電子データで作っただけで、それ以上のことは何もできませんでしたから、広報宣伝だけは空手では困難だったと感じます。観覧者数の集計は取られていませんが、これをひとつの興行としてみると、大規模な特別展と同じようにはいきません。しかしそれは、酒というテーマがあまりにも私たちの日常に溶け込んでいて、センセーショナルな話題となる題材ではなかったことにもよるでしょう。酒というテーマは、むしろじっくり時間をかけて取り組んでこそ、時空を超えて広い歴史の脈絡と結びつき、地域のさまざまな話題と絡み合って、永く耕し続けられるテーマになると思います。

日本酒の生産量は全国的に減少傾向ですが、とりわけ岡山県内ではその度合いが強く、長く続いてきた酒造会社が次々と製造をやめています。これには、近畿地方に近いために第二次大戦後から原料供給(いわゆる「桶売り」)の割合が高く、独自ブランドの立ち上げが困難になっていることも理由といわれます。

しかし、酒造の技術は、米や水や気候などの風土に根差して受け継がれてきたものなので、ひとつの銘柄を作り続けられなくなることは地域の文化資産の喪失をも意味します。酒造会社は地域の名望家として社会の発展にも影響を及ぼしてきたので、それが突然なくなれば地域に大きな穴が開いたようになります。風格ある多数の蔵が並ぶ酒造会社が、文化的な景観の構成要素として重要な役割を果たしていることからもそれはうかがえます。

こうしてみると、私たちは資料保存機関として安閑としてはいられない気持ちにもなってきます。このたびの展示を通じて私たち自身が酒とその文化への関心を深め、多くの人と知り合うことができました。これを一過性の出来事とせず、息の長い活動へつなげていくことができれば、むしろ将来においてこそ着実な成果が得られそうに思います。

このたびの展示がきっかけで、資料保存機関が行う堅実な活動というものを、多くの人に知っていただけたなら幸いです。

【参加機関と展示名、および内容(五十音順)】

- 赤磐市山陽郷土資料館「赤磐の酒　−みのる・かもす・いわう−」
  酒に関係する古墳時代の出土品と赤磐市内に多数立地する酒造会社の資料を展示
- 赤磐市吉井郷土資料館「赤磐の酒　−みのる・かもす・いわう−　in 吉井」
  赤磐市内の酒造会社と山陽郷土資料館の展示の様子をパネルで紹介
- 岡山映像ライブラリーセンター「醸す　岡山の地酒」
  動画映像で酒造りの工程や昭和30年代の密造酒の摘発の様子などを紹介
- 岡山空襲展示室「否定される酒、肯定される酒　−戦時下のくらしの中で−」
  物資が欠乏した戦時下に、酒がどのように扱われたかを資料とパネルで紹介
- 岡山県立記録資料館「晴れの国おかやまの酒」
  岡山県内の酒造に関する話題(雄町米や備中杜氏など)を記録資料で紹介
- 岡山県立図書館「岡山のサケ・さけ・酒」
  酒や醸造に関する各種図書と県内の酒造会社のパンフレット、チラシ等の紹介
- 岡山県立博物館「豊作の祝い」「備前焼の酒器?」
  民俗儀礼や庶民の暮らしの中の酒、および備前焼徳利の起源をめぐる資料の展示
- 岡山市立中央図書館「所蔵の古文書にみる岡山城下町の酒造と酒販」
  幕末の岡山城下町における酒造と酒販の保護・統制に関わる文書を紹介
- 岡山大学付属図書館(中央図書館)「古文書に見る江戸時代の酒造事情」
  県内の在方酒造関係文書、酒造工程を示す近世の書物、農学部ブランドの酒を紹介
- 公益財団法人吉備路文学館「酒豪“人間国宝陶芸家二人のエピソード”　〜金重陶陽・藤原啓〜」
  文学から転向して大成した藤原啓と、彼に手ほどきした金重陶陽の友情と酒器を紹介
- 瀬戸内市民図書館「酒と人と地域と」
  牛窓地区の酒造会社、高祖酒造の紹介と虫明焼の酒器などの地域の資料の展示
- 備前市埋蔵文化財管理センター「びぜんトックリーズ　〜窯跡出土徳利勢揃い〜」
  窯跡から出土した多様な備前焼徳利を展示して備前焼の生産地の資料を紹介
- 備前市歴史民俗資料館「びぜん酒造屋さんの日々」
  市内の酒造会社の一括資料(文書、酒造道具、酒瓶、書籍等)を展示

なお、この企画については近く刊行予定の『岡山県立記録資料館紀要』第12号にも筆者の紹介文が掲載いただける予定です。